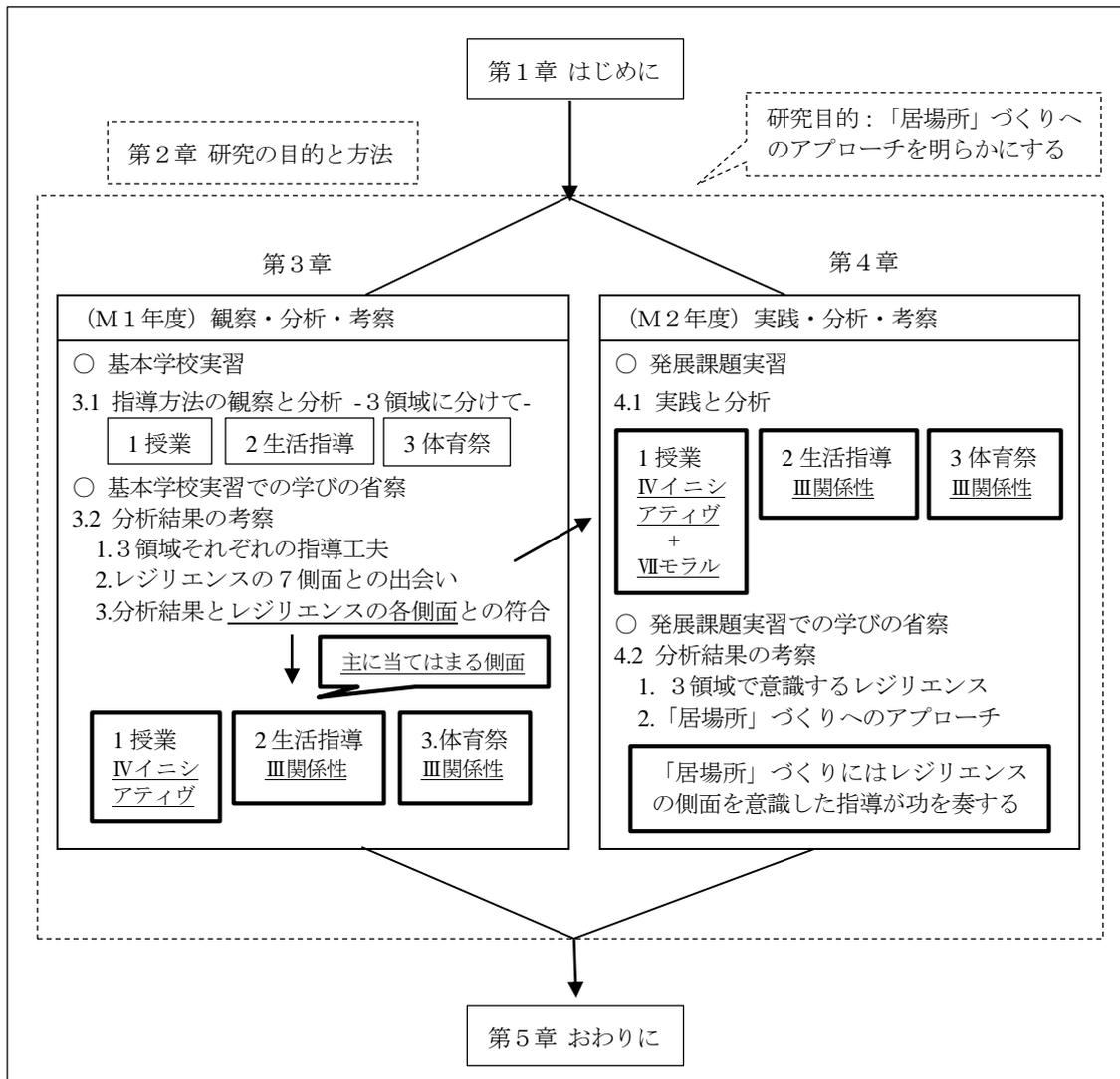


# 全ての生徒が「居場所」をもつ学校づくり

— ある高校におけるさらなる進化の取組みを基に考える —

学籍番号 j159983  
氏名 森 慎也  
主指導教員 中西 修一

## 0. 研究の枠組み



## 1. はじめに

第1章では、研究テーマを設定した筆者の想いを述べる。高校ほぼ全入の状況の中、「全ての生徒に輝くチャンスがあり、輝くことで他者から認められ、充実した高校生活を生徒が送れるような学校」をつくるのが筆者の理想である。そのために、筆者が高校の教員になることで、筆者も憧れたそうした高校生活を生徒と共に過ごし、高校の教員として、全ての生徒が「居場所」をもつ学

校づくりを行いたいと考え、研究テーマを設定した。

## 2. 研究の目的と方法

第2章では、研究テーマを追究するために本研究の目的と方法を述べる。実習校の遅刻欠席数の少なさが何年間も続いている現状から、実習校では生徒の「居場所」づくりを行う指導工夫があるのではないかと考えた。そこで筆者は、文部科学省(1992)や中島(2007)を参考に「居場所」を「他者との関わりの中で輝き認められる場所」と定義し研究を進めるため、以下のように研究の目的と方法をまとめた。

|       |  |
|-------|--|
| 研究の目的 | 実習校の先生方が学校に生徒の「居場所」をつくるためにどのようなアプローチをしているか、観察と実践を通して明らかにする。  |
| 研究の方法 | ① 約20年前の実習校で勤務されていた先生方へのヒアリングから、指導の成り立ちを学び、観察の着眼点を明確にする。<br>② ①の着眼点をもとに、指導方法の観察や聞き取りを通して指導工夫を分析したものを、レジリエンスの7側面と符合する。<br>③ ②をもとに筆者も実践し結果を分析考察する。 |

## 3. 指導方法の観察・分析・考察

第3章では、実習校の指導の成り立ちを知る先生方に指導の肝となるポイントをお聞きし、それをもとに3つの領域(授業・生活指導・体育祭)に分けて観察・分析を進めた。その中で筆者は「生徒に諦めさせず、出来る経験を与えたい」「何かをやり遂げる経験から達成感や充実感を与えたい」等の想いが込められた先生方の指導工夫を見出した。それは筆者が学習していたレジリエンスの側面を意識した指導であると筆者は考察し、レジリエンスの各側面と先生方の指導工夫を符合することで、「居場所」づくりのアプローチの先生方の実践を理論づけした。



レジリエンスの7側面

## 4. レジリエンスの側面を意識した実践・分析・考察

第4章では、第3章で得た学びを基にレジリエンスの側面を意識した実践を行った。それを授業の領域では生徒のプリントやアンケート結果から、生活指導と体育祭の領域では玉瀬(1992)のカウンセリングにおける3つの関わりを用いて分析し、「居場所」づくりのアプローチにレジリエンスの側面を意識した指導が功を奏するかを検証した。その結果、実習校では「Ⅲ関係性」を意識した生活指導」「Ⅳインシアティヴ」を意識した学習指導」の両輪を土台に「Ⅲ関係性」を指導の肝に据えた体育祭」を行うことで生徒の人間力を向上させることを、「居場所」づくりへのアプローチとしていると考察した。

## 5. おわりに

第5章では、対話を通して生徒に寄り添った指導を行う実習校の伝統がさらなる進化の取組みの基にあること、実習校の「居場所」づくりが一朝一夕に出来たものではないことを改めて振り返る。それを踏まえ、筆者が「全ての生徒が「居場所」をもつ学校づくり」を行うための3段階をまとめ提示し、本研究をその第1段階と位置づけ、今後の研究の方向性を述べる。